西宮公同教会・西宮公同教会 教会学校・西宮公同幼稚園

ぶんこだより

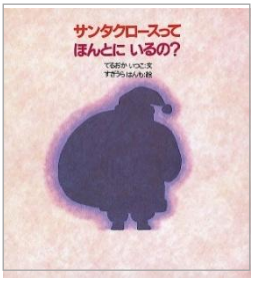
子どもたちと、もっともっと絵本を楽しんでもらいたいから…

12 DEC 2025

「サンタクロースのねがい」

教会学校の、クリスマス献金のお願いで、**「クリスマス人形のねがい」**（文：ルーマー・ゴッデン、画：バーバラ・クーニー、訳：掛川恭子／岩波書店、2001 年）と**「サンタクロースってほんとにいるの？」**（文：てるおか いつこ、画：すぎうら はんも／福音館書店、1982 年）を紹介しました。

「『願い』というものは、『ねがってもどうにもならない』ではなく、『願って』『願って』『願う』時、願い通りではなくても、何かが必ず実現しなくはないことを描いた」のが、「クリスマス人形のねがい」であること。「サンタクロースってほんとにいるの？」は「いつかは『卒業』するサンタクロースですが、この絵本は、そんな問いを投げかけられた大人・お父さんが、その『難問』をそらさずに答えるところが見事なのです」と書きました。



「クリスマス人形のねがい」に絵を描いたバーバラ・クーニーは、**「にぐるまひいて」**（著：ドナルド・ホール、画：バーバラ・クーニー、訳：もき かずこ／ほるぷ出版、1980 年）など、北米大陸に移住した人たちの素朴な生活を描いた優れた作品の著者でもあり、他にいくつかのクリスマス絵本の絵も描いています。

「とってもふしぎなクリスマス」（文：ルース・ソーヤー、画：バーバラ・クーニー、訳：掛川恭子／ほるぷ出版、1994 年）、**「おもいでのクリスマスツリー」**（文：グロリア・ヒューストン、画：バーバラ・クーニー、訳：吉田新一／ほるぷ出版、1991 年）。

「むかし、むかし」で、その由来を語るところから始まるのは、物語の語り手でもある、ルース・ソーヤーらしい始まりです。クリスマスは、その由来から言って、どこの、誰にでも起こる、「よい知らせ」なのです。ただし、ぼんやり誰にでもではなく日々の日常を、共有・共生する、一緒に生きることを、大切にする人たちのところで、その日常を少なからず広いものにする形で起こるのです。

しかし、そんな物語は、物語としての骨格がしっかりあって、大きくはなくても、小さな生活の積み重ねの中で、「良いこと」として実現するのです。

「とってもふしぎなクリスマス」でも「おもいでのクリスマスツリー」でも、バーバラ・クーニーの絵は、登場する人たち、子どもたちの表情で、身ぶりで、手振りで、手や体の触れあいで描きます。たとえ、絵本の絵の、小さな表情、身振り、手振りで、手や体の触れあいであっても、それを描くのは、描けるのは、登場する人たちへ絵本を描く人間としての心を届けたいという願いがあってのことだと考えられます。

そして、「とってもふしぎなクリスマス」も「おもいでのクリスマスツリー」も、そこに少なからず、大きな影を落としているのは「戦争」です。

戦争が、平凡な、そしてそれこそがあるべき生活、日常を奪ってしまうことを、これらの絵本は、いわゆる戦争批判ではなく静かに、しかし、決してそれをしてはいけないことを、絵本で描かれる人たちの日常の言葉で明らかにして見せるのです。

クリスマスの不思議、希望、喜び、願いを、直接人間の世界からではなく、自然の一部として人間とも共生する、動物たちの世界から描いたのが**「ぎんいろのクリスマスツリー」**（著：パット・ハッチンス、編：わたなべしげお／偕成社、1975 年）です。

少なからず、「変った」動物たちの描き方ですが、「人形っぽい」

動物たちです。いわゆる「リアル」でないところが、その存在を際立たせていると言えるように思えます。ページごとに登場する動物たちは、何よりも、かなり大きい目の、その「輝き」が、その不思議、希望、喜び、願いがクリスマスであることを、動物たちを通して伝えられるのが「ぎんいろのクリスマスツリー」です。

そして、クリスマスの喜び、うれしさは確かに届けられた「モノ」ではあるのですが、それより何より、その喜びを共有する「ツリー」にあることを、「ぎんいろのクリスマスツリー」が明らかにするのです。

紹介するクリスマスの物語に共通しているのは、それが生活の中にある時の、確かで、そして共有する人たちの存在こそが何よりもうれしいことを知らされます。

そんなクリスマスの物語の、日々の生活の積み重なりを、一つ一つ描いたのが**「山のクリスマス」**（文・画：ルドウィヒ・ベーメルマンス、訳：光吉夏弥／岩波書、1953 年）です。

それは、「町の子ハンシ」の、「いよいよ、あすから、クリスマスのおやすみ」の最後の学校の様子から始まります。

「学校」というものが、少なからず、子どもたちの、子どもらしい感覚からずれていることを、ベーメルマンスはさり気なく、しかしはっきりと描きます。

そうして、始まったのが、ハンシの、「山のクリスマス」への旅です。旅とは言うものの、その旅で描かれるのは、子どもたち、というより人間の世界の日常の広くそして驚きや喜びに満ちた営みです。しかも、その一つ一つは、特別ではないのですが、実はいっぱいの驚きや喜びに満ちていることが余すところなく描かれます。あたりまえの日常こそが、興味深い、そしてあきることのない生活であり、生活そのものが、人の生きた姿であることが、描かれます。

そして、そんな生活の延長線上にあるのが「山のクリスマス」なのです。そんな表題の物語絵本なのですが、そのクリスマスが伝えるのは、決して特別ではないけれども、どんな意味でも守られねばならない日常なのです。特別に光り輝く日常ではありませんが、その日常が「山のクリスマス」の最後のカラーの絵で描かれています。みんな「いい顔」をしているのです。

絵本とともに

～絵本とともに、子どもと歩む日々～

クリスマス絵本、たくさんありますよね。本屋に行って、クリスマス絵本のコーナーを見ているだけも、わくわくと楽しい気分に！私は「毎年１冊だけ買い求める」という自分ルールを密かに実行しています。１冊にしないと、本棚がクリスマス絵本だらけになってしまいそうで…そんな風にして集めた絵本たちをこの時期に読むことも、楽しみの一つです。

「クリスマス・イブ」

（文：マーガレット・W・ブラウン、画：ベニ・モントレソール、
訳：矢川澄子／ほるぷ出版、2003 年）

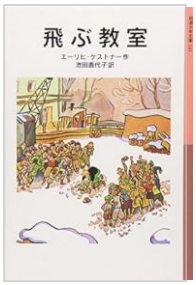
数年前に我が家にやって来たこの絵本です。どうしてこの絵本に惹かれたか、それは…、「オレンジ」だからでした。（絵本に出合うきっかけは様々ですね！）クリスマスといえば「赤」や「緑」で彩られたものが多い中、この絵本は、ほぼ、「オレンジ」で描かれています。絵をつけたのは、イタリアの舞台美術家出身のベニ・モントレソールです。

この絵本から感じるのは「静けさ」

ある家に、住む４人の子どもたちが「ねむるまえに　みんなで　したへいって　クリスマス・ツリーにさわって　おねがいごとをしよう」とベッドを抜け出すのですが、いざ、ツリーの前まで来ると…、「はなすことも　うごくことも　できません。まるでまほうが　ほんとうになったみたいでした。　おお　ツリーです。　みごとなクリスマス・ツリーです。」真夜中という時間、大きなツリー、クリスマスのにおい、この特別な空間を前にして、話すことも、動くこともできなくなった子どもたち。子どもたちが、ツリーを前にして特別な時間を過ごしたことが、静かに、伝わってきたのでした。（胸がどきどきしたままベッドに戻った子どもたち、眠ることはできたのかな。）

「飛ぶ教室」

（作：エーリヒ・ケストナー、画：ヴァルター・トリアー、
訳：池田香代子／岩波書店、2006 年）



続いての物語に惹かれた理由は、ケストナーの本だったからです。初めて読んだケストナーの本は「エーミールと探偵たち」でしたが、これが衝撃的に面白かったからです。そして「飛ぶ教室」という変わったタイトルだったからです。「教室が飛ぶ？なんだか面白そう。」と、思ったのです。実は…、読むまではクリスマスの物語だということも知りませんでした。「飛ぶ教室」は、ケストナーのこんな一文から始まります。「こんどこそ、クリスマス物語の決定版を書く。」この言葉通り、私の「クリスマス物語の決定版」となった 1 冊なのでした。

舞台は、ドイツのギムナジウム（小学 4 年修了後に進学できる 9 年生の高等学校）、寄宿舎に入っている 5 人の男の子たちがこの物語を繰り広げます。優等生で絵が上手く家が貧しいマルティン、父親に捨てられ NY からドイツへ一人で渡ったジョニー、ボクサーを目指す食いしん坊のマティアス、自分が臆病者だと悩むウーリ、頭が切れるセバスティアーン、それぞれが個性を発揮しながら、そして思い悩みながら、思春期の真っただ中を懸命に生きています。

このお話を私は何度か読んだのですが、真っ先に思い出す二つのことがあります。一つ目は、クリスマス休暇を前にして、マルティンが両親の待つ家へと帰ることができずにいた時の正義先生とのやりとりです。二つ目は正義先生と禁煙さんという大人の存在です。クリスマスツリーのもとで家族と共に過ごすことがどんなに愛おしい時間かが、マルティンの行動を通して伝わってきます。小さな子どものように駄々をこねるわけにもいかず、大人のように他のことで気を紛らわして自分の気持ちを抑え込むわけにもいかない、そんな少年が涙を見せることができる大人は…そう、正義先生でした。正義先生と禁煙さん、この 2 人がどうしてこう呼ばれるか、子どもたちがどうしてこの 2 人の大人のことが大好きなのか、是非本を手に取ってお確かめいただければと思います。

以下、心に残っている 2 人の言葉です。

禁煙さん：「世間にはぼくみたいな生き方の人間がすくなすぎるんだよ。ぼくが願っているのは、なにがたいせつかということに思いをめぐらす時間をもつ人間が、もっとふえるといいということだ。」

正義先生：「いちばんたいせつなことをわすれないでほしい。過ぎ去ってほしくない

いまこのとき、きみたちにお願いする。子どものころのことを忘れないでほしい。きみたちはまだ子どもだから、いまそんなことを言われても、よけいなことのように聞こえるかもしれない。でも、これはけっしてよけいなことではないのだ。わたしたちの言うことを信じてほしい。」

今年もクリスマスのこの時期に、この本をじっくりと読むことができたことを幸せに思います。

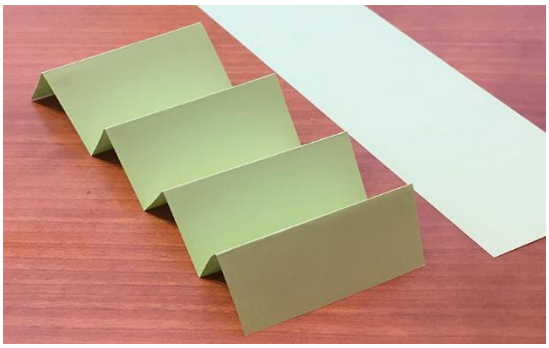
今月のつくって！あそぼう！

切り紙で簡単クリスマス飾り！

折り紙とハサミ１本で簡単に作れる切り紙。ざっくりとした下絵で、かわいい作品が作れます。

「ものづくりハンドブック４」
（著：「たのしい授業」編集委員会／仮説社、1996 年）より

折り紙や、またはコピー用紙などを、山折り、谷折りを交互におります。



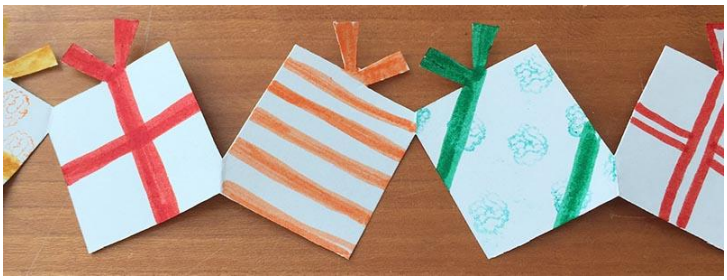
写真では 8 つ折りにしてありますが、それをさらに半分にした 16 つ折りでも作れますので、どちらも挑戦してみてください。

クリスマスツリー

もみの木の一番下の部分だけつなぎ合わせます。クリスマスツリーのように、リボンや星などを書き足してもよさそう。

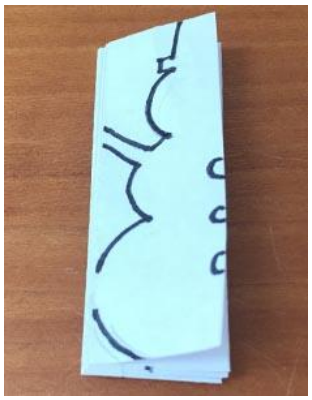
プレゼントボックス

箱を斜めにして動きをだし、まっ白なままどと寂しいので、カラフルにペンでリボンを書き足しても OK



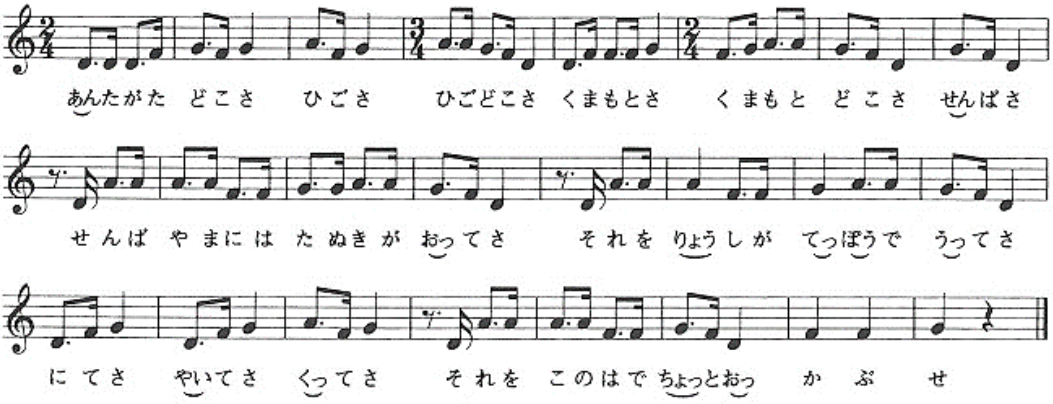
3段雪だるま

8 つ折りをさらに半分にして 16 つ折りで作成。帽子をかぶせて、お腹にボタンを。帽子をカラフルに。



今月のわらべうた

♩あんたがたどこさ



♩ねんにいちどのもちつきは

ねんにいちどの　もちつきは　ぺったんこ　ぺったんこ

ぺったん　ぺったん　ぺったんこ

おっこねて　おっこねて　おっこね　おっこね　おっこねて

とっついた　とっついた　とっつい　とっつい　とっついた

とーん　とーん　とんてんとん　とんてん　とんてん　とんてんとん

てんまり歌（越後のわらべうた）

ひとうつ　ひばしでやいたもち
ふたあつ　ふくふく　ふくれもち
みっつ　みごとな　きなこもち
よっつ　よごれた　あずきもち
いっうつ　いんがの　かぶれもち
むうつ　むくむく　こぬかもち
ななあつ　ななくさ　ぞうにもち
やあつ　やひこへ　あげるもち
ここのつ　ここらへ　くばるもち
とおは　とのさへ　あげるもち
あげるもち

「おはなしのろうそく８」（東京子ども図書館編）より

こうどうぶんこの児童文学（教会学校文庫）

～みんなにたくさんの本を楽しんでもらいたいから～

「クリスマス人形のねがい」

（文：ルーマー・ゴッテン、画：バーバラ・クーニー、訳：掛川恭子／岩波書店、2001 年）

「これは、ねがいごとのお話です。」

こう始まります。

孤児院で過ごす 6 歳の女の子アイビーと、おもちゃ屋で誰かに買ってもらいたいと願うクリスマス人形のホリー、子どもに恵まれず寂しい気持ちを抱えながら過ごすジョーンズ夫妻…。それぞれの登場人物のひたむきな「願い」と「生きる時間」が紡ぎ合わされていく奇跡。運命の出会いに至る過程、ストーリー展開はまるで映画を見ているかのようで、「もしこうならなかったら…」の一文からは、「希望を失わない強さ」「願い続けること」そこから「運命」「奇跡」へと導かれる…。奇跡は本当に起こる！！求めることで願いは通じる！！読後はそんな気持ちでいっぱいになります！！

この時期、サンタさんからのプレゼントを首を長くして待つ子ども達ですが、おもちゃの方も「子ども達と遊びたい」と願っているのかもしれません。クリスマス前に読むと、おもちゃに対する深い感情を覚えるのではないかな…。作者ゴッデンの「お人形は誰かに遊んでもらってやっとお人形といえる」という言葉。納得です。

街の広場の“クリスマス市”の描写もとってもわくわくします。待ち遠しいと思う気持ち、願うこと、愛すること、一年を振り返る事…、そんなことを考えるちょっとした気持ちの余裕を与えてくれました。

皆さんは 2025 年どのような一年でしたか？私は今年のお正月に 3 つの目標を立てて過ごしてきました。全てを達成するなんて詰め込み過ぎではないかと思ったのですが、偶然が重なり必然に…。そんな流れで 3 つを達成することのできた一年でした。そんな中、今年最後にこの物語を再読し《願うことから道は開く》こと、信じることで良い流れに繋がるのかな…、そんな風に物思いにふけるいい時をいただきました。

強くて優しくて美しいお話です…。是非ご一読ください。そして幸せなクリスマスを迎えられますように。

こうどうぶんこにようこそ

「こうどうぶんこ」は、およそ 50 年前、石井桃子の「子どもの図書館」（著：石井桃子／岩波書店、1965 年）に促されるように、教会礼拝堂の隅っこに 2 本の本棚に絵本を並べて始まりました。

始めてみて、何よりも驚いたのは、読み聞かせする大人と絵本に、いわば「我を忘れて」向かってくることでした。子どもは、絵本・本が大好きなのです。

「こうどうぶんこ」は、「絵本・本好き」の子どもたちの力で続いてきました。

「こうどうぶんこ」にようこそ！

「こうどうぶんこ」は、集まってくる子どもたちの絵本と児童文学の「お部屋」です。

１、会員になってください

「こうどうぶんこ」の会員になってください。登録だけで、入会金・会費は不要です。2025 年

毎週水曜日（不定期で、お休みの時もあります）。

借りるのも、返すのも、午後 3 時～4 時 45 分まで。

２、ぶんこの部屋

「こうどうぶんこ」は、絵本の貸し出し（読み聞かせ）、朗読、わらべうた（マザーグース）、なぞなぞなど、言葉であそぶ時間です。

３、１度に借りられる冊数

1 人につき 5 冊まで。

４、貸出期間

2 週間

５、利用登録

本を借りられる方は、お名前、住所、連絡先などの登録をしてください。

６、お問合せ

〒662-0834　西宮市南昭和町 10-22

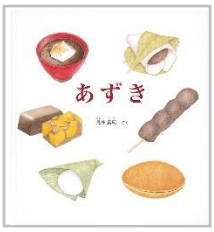
西宮公同幼稚園内　こうどうぶんこ

TEL：0798-67-4691

FAX：0798-63-4044

MAIL：koudou@gammma.ocn.ne.jp

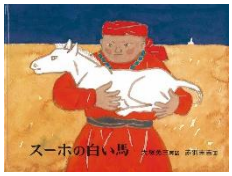
こうどうぶんこ



日時：毎週水曜日 15 時～16 時 45 分

＊祝日は、休み。また不定期でお休みすることがあります。

場所：ぶんこの部屋（西宮公同教会付属 西宮公同幼稚園）



January 1 2026

日	月	火	水	木	金	土
				1 元日	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12 成人の日	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

February 2 2026

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11 建国記念の日	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23 天皇誕生日	24	25	26	27	28

編集後記

私たちが編集･発行しています。ご意見や感想、お聞きになりたいことがありましたらお声かけください。

菅澤・濵・田場・金澤